

4) タチバナモドキとトキワサンザシ=橘擬と常葉山査子

タチバナモドキはバラ科の常緑低木で、原産地は中国南西部、世界ではヨーロッパ南東部からヒマラヤ、中国にかけて6種が分布する。日本ではタチバナモドキの他近縁のトキワサンザシがよく栽培されている。高さは3mほどになり、葉は長楕円形で、長さは5cmほど先端は丸みを帯びる。裏面には短毛が密に生え灰白色を呈する。初夏、葉腋から散房花序を出して、白い5弁花を密につける。果実はやや扁平の球形で、晩秋から初冬にかけて橙色に熟する。枝には堅く鋭いトゲが多数あり、このトゲは翌年に花芽を着ける枝になる。したがって花を着けさせるには、このトゲを切らないことが大切である。しかしこのトゲのために庭に植えるのを嫌うことも多く、その一方でこのトゲを利用して生垣にするケースも多い。和名の由来は木の姿が『橘』に似ているためとされるが、果実や葉は橘とは似ても似つかない。むしろ果実の形が後述する百両のカラタチバナ(06-01-08)に似ているため、こう呼ばれるようになったのかもしれない。別称としてはピラカンサとかピラカンタなどと呼ばれることが多い。

タチバナモドキが日本に伝来したのは明治の中頃のことでフランスから導入され、新宿御苑に植えられたのが最初である。栽培しやすいところから全国に広がり、庭園や垣根によく植えられる。学名は『*Pyracantha angustifolia*』で、属名は「pyro=炎」と「acantha=刺」との合成語、イギリスでは「narrow leaf fire thorn」で、thornは刺のある植物のことを意味している。中国名は『火棘』(ヒラ)であるが、別名も多く『赤果』『純陽子』などがある。タチバナモドキは中国では古くから栽培されていたようで、14世紀に雲南省の蘭茂(ランモ)により著わされた『滇南本草』(シンナンホンゾウ)の中では、『赤陽子』として取り上げられており、果実は産後の子宮出血や虫下し、目の働きをよくする作用がある、と記述されている。しかしこの果実は有毒で、食べると吐き気や呼吸困難をもよおすこともあるという。

タチバナモドキは実がまばらで、庭木としての迫力は乏しい。このため最近ではトキワサンザシ(学名は『*Pyracantha coccinea*』)の方が好まれている。トキワサンザシは南ヨーロッパからアジア西部が原産で、これも明治の中頃に渡来した。これは実つきがよい上に果実の色も真紅で、よく目立つ。またトキワサンザシをアメリカでさらに改良したものに、果実が真紅で大きく、枝がたわむほどに実をつける品種があり、これはトキワサンザシと言わず、ピラカンサスとかピラカンとして人気を得ている。

タチバナモドキもトキワサンザシもピラカンサスも繁殖は挿し木で、簡単に活着するので梅雨時に鹿沼土に挿しておくといよい。植え土は特に選ばず、陽当りさえよければよく育ち、成長も極めて早い。むしろこまめに剪定をして徒長枝が余り伸びすぎないようにすることのほうが大事である。大きくなると枝がたわむほどに美しい実を着けてくれる。鉢植えで育てることも簡単で、盆栽仕立てにしてもよく映える。日本的な庭よりもむしろ西洋風な庭園によく似合う木といえようか。



見事に開花したトキワサンザシ(ピラカンサス)の花。このほとんどが結実する。このためピラカンサスは秋になると、枝がしなうほど果実で重くなる(埼玉県嵐山町)。



トキワサンザシ(ピラカンサス)の果実(埼玉県嵐山町)。



ビッシリと実を付けたトキワサンザシ(ピラカンサス)は枝がたわむほどである(埼玉県嵐山町)。



ピラカンサスや後述するセンリョウ、それに前述の美男カズラなどは、赤い果実のほか、橙色の実を結ぶものもある。この写真では赤と橙の2種類が植え込まれている(埼玉県深谷市)。



大谷石で作られた蔵の傍らにピラカンサスが植えられている(栃木県塩谷町)。

[目次に戻る](#)